

序

1. 言葉と出典、仏典ほか

2. 「大智浄光」について

3. 「愛語」について

「仏教の基本・和顔愛語」

正法眼蔵の「愛語」

無量寿経 和顔愛語先意承問

4. 互尊止戈、兵戈無用と止戈為武

5. 山本五十六の残した言葉より 略

やってみせ …… 愛語

国大なりといえども

良寛のうたから

長岡の町なかや郊外の、あちらこちらを巡ると、仏教に関連した言葉が、書や石碑に多く残されていることに、お気づきの方もおられると思います。ここ長岡は、越後の国の昔から、親鸞さん、良寛さんはじめ、多くの高僧が訪れ、暮らしたところ、生誕なさったところでもあることも、その一因と思います。

いろいろな言葉がありますが、その多くは、同じ内容を含んでおり、仏法の云わんとしていることの基本は、みな同じなのではないかと思うことも、しばしばです。

様々な経典、多くの高僧・先人の云っていることは、それぞれ相手にさ相手によって、その場によって説き方を変えたもの、また自分が理解し、再構築した言葉で表現を変えたもので、基本は同じなのです。

そう思わざるを得ないのです。

MfG_J_Buddhism_in_words_in_Nagaoka_summary

～ 大智浄光、悠久山、互尊・五十六さん、その他

仏典、四書五經に由来する言葉 長岡版

言葉	使用された場所	出典
大智浄光 大光	旧長岡現代美術館、 大光銀行本店の前庭	観音経 and 仏説無量寿経
堅正 やって見せ 兵戈無用	悠久山・研修道場寺院 山本五十六の言葉 野本恭八郎・互尊止戈の元	讃仏偈（仏説無量寿経） 愛語(正法眼蔵) and 仏説無量寿経 仏説無量寿経
愛語 和顔愛語	良寛禅師謹書のほか、 さまざまなところ	正法眼蔵「菩提薩埵四摂法」の巻 仏説無量寿経
怨みを捨てて こそ息む	サンフランシスコ講和会議 で日本を救った言葉	法句経
開発		仏教用語
悠久 高明 無疆 至誠	悠久山・蒼紫神社 山本五十六の好んだ言葉	中庸
難国大 止戈為武	山本五十六の好んだ言葉 平和希求	兵書「司馬法-仁本」 春秋左子伝（『春秋』の注釈書）

讃仏偈 〱 無量寿経

正信偈 〱 教行信証 〱 無量寿経

観音経 〱 法華経

菩提薩埵四摂法 〱 正法眼蔵

仏説無量寿経の兵戈無用

「天下和順（てんげわじゅん） 日月清明（にちがつしょうみょう）

風雨以時（ふううにじ） 災厲不起（さいれいふき）

国豊民安（こくふみんあん） 兵戈無用（ひょうがむよう）」

（天下和順し日月清明なり。風雨ときをもつてし、災厲起こらず、
国豊かに民安くして兵戈用いることなし。）

2. 「大智浄光」について

1) その一

長岡市中心部にあった長岡現代美術館のシンボル、巨大な銅製のレリーフ「大智浄光」という作品名の由来についてです。

正信念佛偈という、浄土真宗の開祖・親鸞上人が著した主著「顕浄土真実教行証文類」、略して「教行信証」の中の偈文で、浄土真宗の門信徒にとって、最もなじみ深い経文があります。正信念佛偈をただ読んだだけでは「浄光」の語句は出てこないのですが、よく詠み込むと「大智」も「浄光」も、正信偈の中の言葉なのだと、気づきました。

新潟県立近代美術館で開催された、2020年の一月下旬からの『「1964年」の長岡現代美術館』企画展の展示コーナーで、作者の斎藤義重さんの言葉がありました。

“各々異なった動きと表情をもつ住人”を表わしたという。
恐らく、浄土ではない、この世、穢土の住人なのだろう。その住人が希求する浄土の「大智浄光」の四文字の各々について、思いをめぐらしたのかも知れない。

この「大智浄光」のレリーフは、長岡市中心部の再開発工事のため、2020年の春に建物から外されましたが、改めて、この場所に新たにできる米百俵プレイスの二棟連結部に展示されるそうです。

2) その二

たまたま駒形十吉さんの年譜を調べていましたら、大光銀行の名称のもと、観音経の一節「広大智慧観 無垢清浄光」に由来するとの記述を見つけました。『観音経』は法華経のなかの「観世音菩薩普門品第二十五」という一章で、

『観音経』の一部の抜き書き

(20) 真観清浄観 広大智慧観 悲観及慈観 常願常瞻仰

(21) 無垢清浄光 慧日破諸闇 能伏災風火 普明照世間

曹洞宗經典には、曹洞宗の宗典「修証義」、日常よく使う「般若心経」、「観音経」などが収められています。

「観音経」は、妙法蓮華経観世音菩薩普門品偈のこと。

また、駒形十吉さんの年譜に、以下の二行があります。

1935 (昭10) 兄宇多七の死去により、堅正寺支援も継承。

1942 (昭17) 「大光無尽」と社名変更

これより、観音経の一節と大智浄光、そして大光の文字については、堅正寺住職との対話、堅正寺での勤行で知り、さらに現代美術館建設に伴い、前庭の美術作品のテーマに、「大智浄光」を選んだと考え、さらに「大智浄光」の最初と最後の文字として「大光」と考えたのかも知れません。ただ、「正信念佛偈の、光あふれる阿弥陀様」は、駒形十吉さんが、育った家で流れていた言葉としても、相応しいと思わざるを得ません。

3. 「愛語」について

「仏教の基本・和顔愛語」

これは仏教の言葉で、「和顔悦色施(わげんえつじきせ)」と「愛語施(言辞施)」をあわせた言葉で、無財の七施～誰でも出来る仏道修行、幸せを施す布施の行、と教えられています。

和顔悦色施とは、やさしい微笑みを湛えた笑顔で、人に接することをいいます。言辞施とは、やさしい言葉をかけるように努めること。

和顔愛語 with a gentle face and a nice word

1. Laughter is the best medicine.

(笑いは最高の薬)

2. A laugh a day keeps the doctor away.

(1日1度笑っていたら、医者いらず)

3. Sometimes laughter is so powerful that even the devil smiles.

(ときとして、笑うことはとても強い力を発揮するので、悪魔でさえも、微笑む)

4. Perhaps only merchants understand best how much money a smile can make.

(おそらく、商人だけがよく知っているだろう。

微笑みが、どれだけお金を稼ぎだすかということ)

5. A joke a day keeps your worries away.

Laugh and be happy.

(1日1つのジョークは、心配ごとをあっちへ追いやる。笑おう、そうすれば幸せになれる)

和顔愛語(笑顔)は、'接した相手も笑顔になり、幸せを施すだけでなく、自分自身の精神面にも良い影響を及ぼす、素晴らしい布施行であります、いざ「和顔愛語」を実践するとなると、簡単ではありません。

そこで大切なのが「先意承問」、つまり「相手のことを先に考えて、与えること」。

笑顔になってほしいのならば、まずは相手に笑顔を見せることです。

優しい言葉をかけてほしいのならば、まずは相手に優しい言葉をかけてあげることです。幸せを求めるならば、まずは相手に幸せを与えることです。

自分から先に相手の気持ちを重んじて、相手の幸せを考えるのです。

大切なのは、思いやり。その心を仏教では「慈悲」(じひ)といいます。

私たちが穏やかに生きるためには、みんなが「慈悲」の心を持つことが大切。

自分も相手も、ともに思いやることを心がけていれば、心がまあるく穏やかになります。

正法眼蔵の「愛語」

道元禅師の著述『正法眼蔵』の巻の中に〈愛語〉の教えがあります。

～正法眼蔵の巻名の一、「菩提薩埵四摂法」のなか

「菩提薩埵四摂法(ぼだいさったししょうぼう)」

菩提薩埵は略して菩薩とよばれている。

道元は、「発菩提心」の巻で、菩薩は、自未得度先度他の菩提心を発悟した人である、といっている。自他の心のない人である。四摂法とは、菩薩の行ずる四つの法、即ち、布施・愛語・利行・同事である。

第一の布施は、幸せを一人占めせず、精神的にも物質的にも広くあまねく施与え与えられていることを感謝して生きること。

第二の愛語は、どんな人に対しても、その人の事を第一に考え、慈悲・慈愛の心をおこし、愛情豊かな親切な言葉で語りかけること。慈愛の心からほとばし出る親しみと思いやりのある言葉は一言一言全てが人々の心を和ませる。愛語は社会を正しい方向へ動かす大きな力となる。

第三の利行というのは見返りを求めない利他の行ない。自分のことは勘定に入れず、他の幸福のためによき手だてを廻らすこと。

第四の同事というのは、自分を捨てて相手と同じ心・境遇になって、ほとけ心はたらかせること。

自らが幸せになりたいと思うならば、他を幸せにしない限り、自己の幸せはなすなわちこの四摂法の実践こそが己の幸せそのものであるといっている。

～以上から、四摂法に云われていることは、『大無量寿経』に説かれる四十ノ願の第十八番目「至心信樂の願」そのものであり、簡単に言えば、四摂法の「愛語」という言葉には和顔愛語のみならず、先意承問の意味も、含んでいるように思う。

菩提薩埵四摂法 愛語の原文と現代語訳

愛語といふは、衆生(シュジョウ)をみるにまづ慈愛の心をおこし、顧愛(コアイ)の言語(ゴンゴ)をほどこすなり。おほよそ暴悪の言語なきなり。

愛語とは、衆生を見る時に先ず慈愛の心を起こし、愛顧の言葉をかけることです。およそ暴悪な言葉を口にしないことです。

世俗には安否をとふ礼儀あり、仏道には珍重(チンチョウ)のことばあり、不審(フシン)の孝行あり。

世俗には、相手の安否を尋ねる礼儀があり、仏道にも珍重(お体大切に)の言葉や、不審(ご機嫌宜しゅうございますか)という師を敬う挨拶があります。

慈念衆生(ジネン シュジョウ)、猶如赤子(ユウニョ シヤクシ)のおもひをたくはへて
言語するは愛語なり。

このように、衆生に対して、赤子を慈しむような思いをためて語ることが愛語
です。

徳あるはほむべし、徳なきはあはれむべし。愛語をこのむよりは、ようやく愛語
を増長するなり。

徳のある人に会えば褒めなさい。徳のない人に会えば哀れみの心を起こしな
さい。愛語を好むことによって、次第に愛語を増していくのです。

しかあれば、ひごろしられずみえざる愛語も現前(ゲンゼン)するなり。現在の身
命(シンミョウ)の存せらんあひだ、このんで愛語すべし、世生生にも不退転
(フタイテン)ならん。

そうすれば、日頃知られず見えなかった愛語も現れてくるのです。現在の身
のある間に好んで愛語しなさい。そして、未来永劫に退かないようにしなさい

怨敵(オンテキ)を降伏(ゴウブク)し、君子(クンシ)を和睦(ワボク)ならしむること、
愛語を根本とするなり。

怨敵を降伏し、君子を和睦させることも、愛語を根本とするのです。

むかひて愛語をきくは、おもてをよろこばしめ、こころをたのしくす。むかひ
して愛語をきくは、肝に銘じ、魂に銘ず。

向き合って愛語を聞けば、顔を喜ばせ心を楽しくします。向き合わずに愛語
聞けば、肝に銘じ魂に銘じるものです。

しるべし、愛語は愛心よりおこる、愛心は慈心を種子(シュウジ)とせり。

知ることです、愛語は愛心から起こり、愛心は慈悲心を種子としていることを。

愛語よく廻天(カイテン)のちからあることを学すべきなり、ただ能(ノウ)を賞する
のみにあらず。

このように、愛語には天を回らすほどの力があることを学びなさい。それはた
能力を褒めるだけのものではないのです。

以上

無量寿経 和顔愛語先意承問

仏説無量寿経 P33

無変於不可思議兆載永劫積植菩薩無量德行不生欲覺瞋覺害覺不起欲想瞋想害想不著色声香味触法忍力成就不計衆苦少欲知足無染恚痴三昧常寂智慧無礙無有虚偽諂曲之心和顔愛語先意承問勇猛精進志願無倦専求清白之法以惠利群生恭敬三宝奉事師長以大莊嚴具足衆行令諸衆生功德成就住空無相無願之法無作無起觀法如化遠離龜言自害害彼彼此俱害修習善語自利利人人我兼利棄国捐王絶去財色自行六波羅蜜教人令行無央数劫積功累徳随其生処

**報恩感謝
懺悔滅罪
誓願立志**

**和顔愛語
先意承問
小欲知足**

**志願無倦
(志願倦むことなし)**

仏説無量寿経卷上 正宗分 法蔵修行

注釈版p26

虚空の諸天人、まさに珍妙の華を雨らすべし」と。

【九】 仏、阿難に告げたまはく、「法蔵比丘、この頌を説きをはるに、時に応じてあまねく地、六種に震動す。天より妙華を雨らして、もつてその上に散ず。自然の音楽、空中に讃めていはく、(決定してかならず無上正覺を成るべし)と。ここにおいて法蔵比丘、かくのごときの大願を具足し修満して、誠諦にして虚しからず。世間に超出して深く寂滅を樂ふ。阿難、時にかの比丘その仏の所、諸天・魔・梵・竜神八部・大衆のなかにして、この弘誓を發す。この願を建てをはりて、一向に尊意して妙土を莊嚴す。所修の仏国、恢廓広詔大にして超勝独妙なり。建立 [せられし仏国は] 常然にして、衰なく変なし。不可思議の兆載永劫において、菩薩の無量の徳行を横植して、欲覺・瞋覺・害覺を生ぜず。欲想・眠想・害想を起さず。色・声・香・味・触・法に着せず。忍力成就して衆苦を計らず。少欲知足にして染・意・痴なし。三昧常寂にして智慧無礙なり。虚偽諂曲の心あることなし。和顔愛語にして、意を先にして承聞す。勇猛精進にして**志願倦むことなし**。もつぱら清白の法を求めて、もつて群生を惠利す。三宝を恭敬し、師長に奉事す。大莊嚴をもつて衆行を具足し、もろもろの衆生をして功德を成就せしむ。

法蔵修行

(9) 釈尊が阿難に仰せになる。

「法蔵菩薩が、このように述べおわると、そのとき大地はさまざまに打ち震え、天人は美しい花をその上に降らせた。そしてうるわしい音楽が流れ、空中に声が聞こえ、＜ 必ずこの上ないさとりを開くであろう ＞ とほめたたえた。

ここに法蔵菩薩はこのような大いなる願をすべて身にそなえ、その心はまことにして偽りなく、世に超えすぐれて深くさとりを願い求めたのである。

阿難よ、そのとき法蔵菩薩は世自在王仏のおそばにあり、さまざまな天人・魔王・梵天・竜などの八部衆、その他大勢のものの前で、この誓いをたてたのである。

そしてこの願をたておわって、国土をうるわしくととのえることにひたすら励んだ。

その国土は限りなく広大で、何ものも及ぶことなくすぐれ、永遠の世界であって衰えることも変わることもない。

このため、はかり知ることのできない長い年月をかけて、限りない修行に励み菩薩の功徳を積んだのである。

食りの心や怒りの心や害を与えようとする心を起こさず、また、そういう想いを持ってさえいなかった。すべてのものに執着せず、どのようなことにも耐え忍ぶ力をそなえて、数多くの苦をものともせず、欲は少なく足ることを知って、貪り・怒り・愚かさを離れていた。

そしていつも三昧に心を落ちつけて、何ものにもさまたげられない智慧を持ち、偽りの心やこびへつらう心はまったくなかったのである。

表情はやわらかく、言葉はやさしく、相手の心を汲み取ってよく受け入れ、雄々しく努め励んで少しもおこたることがなかった。ひたすら清らかな善いことを求めて、すべての人々に利益を与え、仏・法・僧の三宝を敬い、師や年長のものに仕えたのである。

その功徳と智慧のもとにさまざまな修行をして、すべての人々に功徳を与えたのである。

4. 互尊止戈、兵戈無用と止戈為武

春日正利

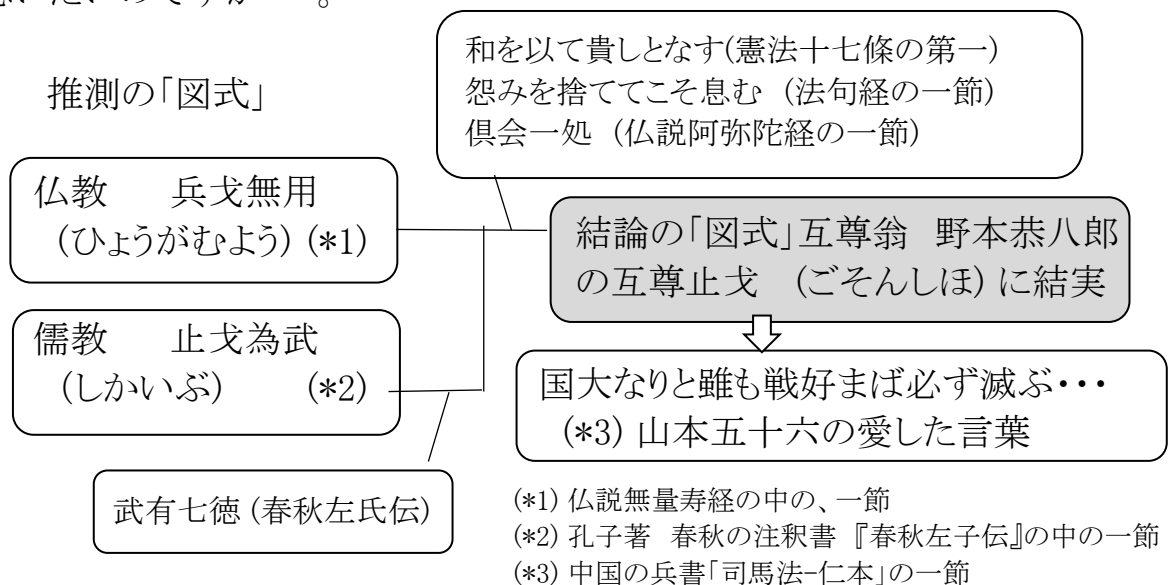
1. 互尊止戈、そして国大なりと雖も、の心を探る

「互尊止戈」(ごそんしほ)、お互いの個性を認め合い、相互尊重の精神を貫けば戦争は止むものだ。互尊翁は、これを書にし、日本が軍事を優先し、政治の武力解決に突き進むことへの警告を発したと言われています。この互尊止戈の考え方が、どこから生まれたのか、気になっていました。

そんな中で最近、ある仏典のなかに、不戦・非戦、そのための仏教的人間形成の言葉として、「兵戈無用」(ひょうがむよう)という言葉に巡り合いました。武器も軍隊もいらない、という意味の言葉で、浄土真宗のお経の第一に挙げられる仏説無量寿経の中の一節です。学者でもあった高僧・木曾恵禅、篤信の教育者・星野嘉保子との交流から浄土真宗に深く触れ、自らも熱心な信者でもあった野本恭八郎にも、なじみのあるお経です。彼らとの聞法の討議を通じて、これらが恭八郎の心の中に、互尊止戈として結実したように思いました。

また恭八郎は、幼少時から小国の生家や藍沢南城の三余堂で儒教を学びました。春秋の注釈書『春秋左子伝』にある言葉の止戈為武(しかいぶ)、武有七徳で、武が争いを止めることにこそあることも、学んだと考えるのが自然です。全ての子供に戦争や病で先立たれた恭八郎は、晩年、亡くなった三男と同一年の山本五十六が帰岡し訪問してくれると、大変喜び話し込んだそうです。

「国大なりと雖も戦好まば必ず滅ぶ」、藩の儒家に生まれた五十六は、軍人の道に進み、この言葉を好みました。恭八郎との対話などを通じて、武装するも「不戦・非戦」という武装中立の決意を、この言葉に託すようになったのでは、と思いたいのですが・・・。



	平和を得る道	中立	
浄土教仏典	仏の道による	非武装中立	野本恭八郎
儒教・春秋	武による	武装中立	山本五十六

2. おのおのの言葉の訳文と補足

(1) 仏典の教え、兵戈無用（ひょうがむよう）～仏説無量寿経の一節

・該当部分の現代語訳

仏が歩み行かれるところは、国も町も村も、その教えに導かれないところはない。そこは、穏やかで国豊かに民安くして兵戈用いることなし。

(2) 仏典の教え、怨みを捨ててこそ息む（やむ）～法句経の一節

・該当部分の日本語訳（仏教学者でもある中村元先生の訳）

実にこの世においては、怨みに怨みを以ってせば、ついに息むことなし。堪え忍ぶことによってこそ怨みは息む。これは永遠の真理なり。

・1951年の日本を日本ににで、当時のセイロン代表も引用

人は愛によってのみ憎しみを越えられる。憎しみによっては越えられない。

敗戦国日本への賠償問題などを討議する場で、当時のセイロン代表の演説が会議の流れを決め、日本は分割統治や多くの連合国からの賠償金請求を免れることになった、日本が忘れてはならないこと。

(3) 仏典の教え、俱会一处（くえいつしよ）～仏説阿弥陀経の一節

・「俱（とも）に一つの処（ところ）で会（あ）う」というご文（もん）

兵戈無用の、究極の姿のひとつと言えます。

「お墓は別々のところで違うかも知れないが、阿弥陀さまのお浄土で仏さまと成って、また一緒に会えるのです。往（ゆ）く場所は皆同じです。」

(4) 儒教の教え、止戈為武（しかいぶ）～注釈書『春秋左子伝』の一節

・本来の「武」とは、戦を未然に防ぐためのもの

戈（ほこ）を止むるを武と為す、と読み下せます。「止」と「戈（ほこ）」を合わせると「武」という字になることから、「武」という字の本当の意味は「戈」を「止」める＝争い・暴力を止めることであり、国の経済力を整え、インテリジェンスを高め、戦を未然に防ぐ、ということが本来の「武」。

・これは同じく『春秋左子伝』の「武有七徳」、武の七徳にも通じる言葉。

一、暴を禁じ。二、兵をやめ。三、大を保ち。四、功を定め。五、民を安んじ。六、衆を和し。七、財を豊かにす。（但し、武装は忘れていないと思う。）

信長の「天下布武」の真の意図は、「武有七徳」で天下泰平の世を作ること。武力による制圧ではなく、「天下に七徳の武を布き（しき）」、それにより戦のない世を作ること、戦国終結への強い意思の表われと言われている。